

〔寺及びその関係〕

〔景福寺〕

微咲山景福寺は泉迫の小丘の上にある。小判山を近くにひかえ、高雅閑静の地で、南に通津の家並みを越えて瀬戸内海の碧波を望むことができる。

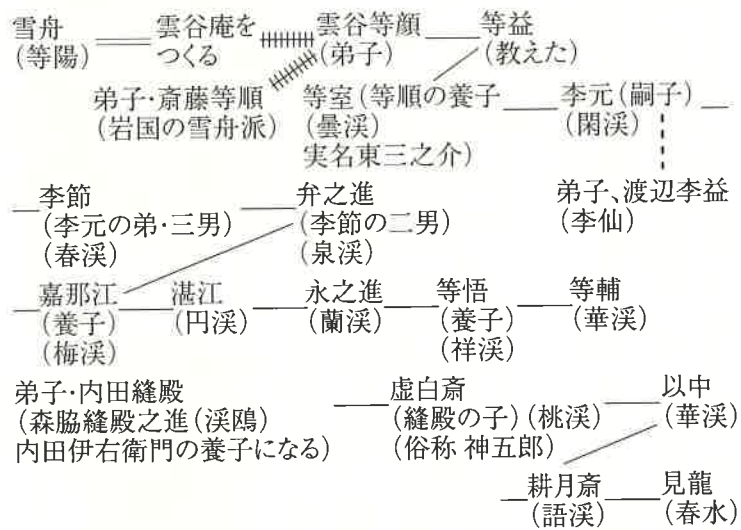
景福寺は黄檗宗で、岩国錦見大円寺末にあたっている。黄檗宗は臨済宗より分かれた一派で万福寺を本山としている。明の黄檗山万福寺の主隠元禪師が承応三年(一六五四)に我国に來朝して山城の宇治に一字を創造し、黄檗山万福寺と号してからこの宗派はひろまっている。門弟は甚だふるい、第二世木庵は更に江戸白金に瑞聖寺を建て、禪風を関東に宣揚した。黄檗山は木庵の後、慧林、独湛、高泉等の支那僧のみ方席を継いだ。が、十四代表統に至って邦人の住持するところとなり、明治九年(一八七六)に宗名を立てて黄檗宗と称したわけである。

景福寺は真言宗珉山和尚の開山と言われるが、病身なため月篷(げっぽう)和尚に譲った。安永元年(一七七二)三月月篷和尚が開山、開基と景福寺記録簿に書かれている。彼は俗名を村中権蔵といい、玖珂郡由宇村横道農業であったが、発心してこの道に入ったものようである。

本尊は聖観世音菩薩である。聖観世音菩薩は大慈観音聖

でも珍重されたとみえ、藩主が参勤の時はその画を携行するのが常であった。享保十九年(一七三四)死去。縫殿の子虚白齋は桃谿(溪)と号した。俗称は神五郎。延享元年(一七七四)以来藩の画用を務め、安永六年(一七七七)六十余歳で死去した。虚白齋の子、以中は父より家法を受け、等溪と号し、六十五歳で死去した。

画の系統：



観音ともいい、六観音、七観音の一つで、悩みや苦しみや悶えをお救いくださる菩薩である。

現在の本堂は明和六年(一七六九)に建立されたと記録にある。長野中に知足寺が明和四年(一七六七)頃大愚禪師(後述)により建立された。景福寺は寺としての活動が弱かったか不在の場合があつたのであろう。月篷和尚が開基するまで大愚禪師が兼務をした。その間本堂も明和六年に再興されたのである。

景福寺には貴重なものが沢山ある。

境内に入ると四国八十八箇所霊山の立札と石仏が山全体に並んでいる。支那より伝えられたという本も沢山ある。大愚禪師の書かれた山号「微咲山」の木額や長野知足寺と景福寺の往復に使った提灯など遺品がある。お釈迦様の涅槃五日前のお姿の掛軸(安永五年一七七六)。掛軸には雪舟末葉、虚白齋桃谿居士揮画と書かれている。この掛軸は御大師法要の日(旧曆三月二十七日)に展示される。

(参考)桃谿についての資料(岩国市史・上巻)によると齋藤李節の門弟で新たに画家の家を興した者に内田縫殿がある。初め森脇縫殿之進と称し、李節に画を学んで溪鴨と号した。内田伊右衛門の養子となり、宝永二年(一七〇五)家督の時、画を家業とするよう命じられ、藩の絵師となった。彼の画は江戸

境内には大愚禪師の胸像石仏や芭蕉の句碑がある。芭蕉の句碑には「あかあかと日はつれなくも秋の風」とある。宝篋印塔(ほうきょういんとう)元文四年(一七三九)三月に建てられた。景福寺が建てられた時建てられたらしい。(参考)宝篋印塔とは『宝篋印陀羅尼經』を蔵する供養塔であるが、現在では塔の二種の形式の名となっており、方形の段形屋根の四隅にひれの如きものをつけていること、上部に相輪を高く立てていることが特色である。この塔は多くは追善供養のために印陀羅尼經その他の經文を書写して中におさめた経塚でもある。(「郷土岩国のあゆみ」より)

南部八十八箇所七十三番霊場 第一番南無本師釈迦牟尼仏(木造り)

薬師堂(南部八十八箇所七十五番霊場)水子御供養 髪が巻きついた女の話(内容説明)昔、浮気をかくして景福寺に参った女の髪がワニ口(ぐち)の綱に巻きついた。以後景福寺には浮気した女性は無くなった。

東沢瀉先生鉄心壮快居士の家紋及び頭蓋骨等の写真。昭和四十四年東沢瀉先生の墓を移転する際、景福寺で一時預かった。その時掘り出した先生の頭蓋骨など写真に写し保存したものである。

(参考)花祭釈尊誕生会法要 新曆四月八日(卯月八日)

弘法大師ご縁日法要 旧曆三月二十一日
盆施餓鬼法要 新曆八月十六日

(エピソード)岩政齋氏の話によると、「昭和四十四年五月九日葉師山(現在のむつみ幼稚園の上)にあった墓地を郷玉坪の墓に移す時、東治子さん(先生の孫娘、平成八年死亡)が来られるまで私が責任者になった。骨を掘り出し壺に入れ、当時の通津を先生にお見せしようと背中に背負い、自転車で街を行つた。役場(現在のJ A山口東農協)の辺りで急に頭が痛くなつたので、先生は満足されたのだと思ひ、景福寺に運んだ。あれだけ痛かつた頭痛は治つた。そこに約一ヶ月あずけた。施工は保津村川組が行つた。」

迫中融著「通津の伝承と伝説」によると、源平戦で通津の田浦(連帆)で早乙女が田植えをしていると、平家の斎藤実盛が逃げてきて、近くの楠ノ木(松崎部落)のホラ穴に隠れていた。早乙女が源氏に脅されて実盛の隠れた場所を教えた。実盛は源氏に殺される時「死後虫になって米を取らせんぞ。」と言つた。この実盛の位牌所として近くの山に景福寺を建てた。(高畑、六呂師の広中役次氏談 福は福王という実盛を専門に演じる旅の六部がいたのであろう。)

通津微笑山景福寺鐘銘

寺旧在本邑先地、称慈雲山慶雲院、不祥開創何時、千載之古

を集め、工司に巨鐘一口を命じ、声を聞いて道を悟り、色を見て心を明にし、縁を正して遠近を結ばしめんと欲す。其の志嘉すべし。題を請ふ、其の銘に曰く

銅頭鉄額、正体堅真なり。通身是れ口、叩(たた)くに随て鳴る。洪音嘹唳として、響き八紘に徹(とほ)る。民を安し国を豊にし、四維寧清なり。長夜月に吼え、均く無明を破る。三千国土、情と非情と。福恵増長し、菩提日に生ず。梵宮の宝器、其の徳名つけ難し。

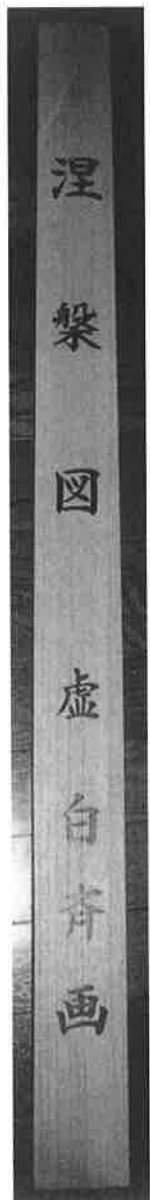
(昭和六十二年十一月『岩国金石文集』徴古館編)

(参考・念「冷さない」の意味がある。宗教に宗には「基本」の意味がある。

観音様「観は「私」、音は「あなた」と云う意味。観と音という二音が二元となつて音声の世界、つまり外界を自由自在に観ることが出来る。それが観世音菩薩の世界)



大愚禅師の使われた提灯



掛軸入れ箱表 字・竹原修一氏

蹟也、就中桂州恒山不得三禅師順居、其徒眠山公訟於官、移

在此月蓬禅師、変革微笑山景福寺、送人瑞龜山大円禅寺、永為末寺時追請本師拙源老和尚、為開山祖、月蓬禅師自為二世、枝々葉々至今、茲明治十二年卯春、寓居大谷、朝眼禅姪等四名善男、発大願、募化四方、集赤銅若干、命工司巨鐘一口、欲聞声悟道、見色明心、正縁令結遠近、其志可嘉、請題其銘曰

銅頭鉄額 正体堅真 通身是口 随叩而鳴、洪音嘹唳
響徹八紘 安民豊国 四維寧清、長夜吼月 均破無明
三千国土 情与非情、福恵増長 菩提日生 梵宮宝器
其徳難名

時明治十二歳己卯二月穀旦

景福寺兼住権中講義 森川仙溪謹誌

(藤田『金石文』)

寺は旧(もと)本邑の先地に在り、慈雲山慶雲院と称す。開創の何時なるを詳にせず、千載の古蹟なり。就中(なかんづく)、桂州・恒山・不得の三禅師順居し、其徒眠山は官に公訟し移て此に在り。月蓬禅師は微笑山景福寺を变革し、送て瑞龜山大円禅寺に入り、永く末寺となす。時に本師拙源老和尚を追請して開山の祖となし、月蓬禅師は自から二世となり、枝々葉々として今に至る。茲に明治十二年卯の春、大谷に寓居の朝眼禅姪等四名の善男、大願を發して化を四方に募り、赤銅若干



お釈迦様・涅槃5日前の掛軸



東家靈位



沢瀉先生頭蓋骨の写真



宝印塔

〔山咲微(びしょうざん)〕



大愚禅師の書の山号額



薬師堂・水子供養

〔長徳寺〕

長徳寺が創設されたのは建武の中興が潰え、筑後川の戦いに敗れた落武者菊地の残党が坊主になり、この地に住み、長野上に長徳寺を創設した応安二年(二二六二)と言われる。

(岩政齋氏談)

長徳寺は現在鶴田美江さん(長野二六〇番地)の上にある。お寺の形をしていない一般の家のようなので分かりにくい。周防長門に二つしかない二国二寺扶持寺(寺領はあるが門徒はない)であった。しかし、後継者がないので現在は松重氏が守をしている。

平成十六年四月十五日改築起工式を行う。

長野村に七堂伽藍があった。七堂伽藍とは

鐘樓門・現在(註：現在とは平成九年十月の時点)の岩政齋氏の少し奥三〇〇m、村上司氏の畠になっている。房守が住んでいた。僧兵時代に僧兵が住んでいた。森重の下まで海水が入った時代の関所役を行っていたとのこと。

古坊院(ふるほういん)・・・大型農道をはさんで岩政氏宅の反対側の山、古坊山にあった。小谷益雄氏(長野三三三九―)の家の前。杉中氏の所有地。僧兵もいたようであるが、大阪夏の陣に僧兵を繰り出して大阪方に味方して大敗し、長徳寺を残して末寺の者は僧籍にあることも許されず、百姓に身を落して渡世した。

岡の塔(堂と言う人も)・・・長野中の岡阜月(さつき)氏の家(長野七三六)の下。

吉祥坊院(きちじょうほういん)・・・岡氏の真南に佐伯一男氏の家で大きな堂があったが、そのあたり。現在は広島県和田氏所有。

辻堂・教覚寺(長野五八二)の手前北側。もと佐川氏(長野五八三―)の家があったところ。

明王院・長野上重岡キヌヨ氏(長野二七七)の西南。

五重の塔・重岡氏の家のすぐ上にあった。

村重圭二氏は七堂伽藍として小堂、開ヶ堂、高堂、岡の堂、辻堂と後二つの名前は忘れたがこの七つと言う。

(参考) 伽藍とは仏教用語で寺院を意味する語。梵語のサングラーマ(僧伽藍摩)の略で、僧伽は衆、藍摩は園を意味し、そこから伽藍は衆僧の集合所つまり寺院となった。伽藍は通常南を正面に建てられ、その堂舎の配置は時代や宗派により異なり、学問を中心とする所では塔・金堂(こんどう)・講堂・経蔵(きやうぞう)・鐘樓(しようろう)・僧房(そうぼう)・食堂(じきどう)などからなる。わが国古代の伽藍配置の様式には飛鳥寺式・四天王寺式・法隆寺式・薬師寺式・東大寺式などがある。(「ピクトリア、現代新百科」による)

長徳寺は現在臨済宗天竜寺末であるが、元来は真言宗であり、四国八十八ヶ所があり、毎年その巡礼行事が行われていた。「奉納南部八十八ヶ所、同行一人」のお札を納めて歩いた。同行二人とは弘法大師と二人の意。

(岩政齋氏の説明)

長徳寺は度重なる焼き討ち、火災他で堂宇を焼失したことで分明でないこともある。解体時の寺の木材は岩国城建設時に用いられたと言われている。

(松村勇著「通津あれこれ」によると)

長徳寺は長野舞々にある。禅宗永興寺末とい山号を護国

山という。玖珂郡志によれば広家公御討入のとき、廃寺とし、

岩国御普請の用木としたらしい。吉川広紀公代再興申渡状によれば、広紀公の命を受け、職事横道倫有が再興のため努力せられた由である。一つには武運長久のため、今一つはそれ以前前の古墳数多くあるためこの亡魂追善がその大きいねらいであったようだし、僧に対してはその観念で勤行に専念するよう申渡状として今田与三郎左エ門及び末永三郎右エ門の印判が捺されている。これが元禄八年正月十六日のことである。

長徳寺由来書によれば、長徳寺は往古寺ではなく、三十万石以上格式のある大名であったのが、寛正六年(一四六五)二月十七日小名となり、国官の外に官位はなくなった。そこで文明二年(一四七〇)三月二十五日京都建仁寺へ願い出て官位を賜り、勅願の列に任ぜられた。その時この寺は七堂伽藍作にして長さ二〇四間、赤線入りの練塀あり、而して京都建仁寺の直末にして長野村護国山長徳寺と申して御朱印壺万石なり。

山門の紋には葵の御紋付で内七堂には五七の桐に菊の御紋付で、又南に本門、寅卯に裏門があつて、式中式下に役寺が六所あつた。金石山連照院、明王院、持法院、周公院、多門院、寺祥坊がそれであり、連照院の外山号はない。此の寺の僧百二人、侍三百人、百姓八十人あり。此の時十六代目なり。然るに十七代目の長老は肥後熊本城主加藤肥後守清正の二門に加

藤立本と申して二千百石の四男長老となり、此の長徳寺の住職となった。此の時が慶長十九年(一六四四)正月八日という。

附臣四人(斎藤秀之丞、加藤常吉、石井幾平、守田作門)はこの寺の僧百一人、侍三百人、百姓八十人召連れ、大阪合戦に出陣し敗れ、慶長十九年十一月焼討ちされ、一同残らず討死した。

ために、本尊もなく、断絶していたが、元禄八年(一六九五)正月十六日に再建された。

(エピソード)同行二人、大師様の奇跡体験(岩政斎氏談)

確か大正十三年の暮に食道癌と診断された私の祖父音次郎は当時のごとて手術の手段もなく、十四年三月頃から固形物は全く喉を通らず、好きな酒も小盃一杯も呑み下すのに十々十五分を要するようになり、近親の森山医院の一日置き薬餌(栄養)注射で辛うじて余命を保っていた。そうした四月のある日の夕刻、森山先生も注射を終え、家族と雑談していたところへ、弘法大師への信仰が厚く、四国八十八ヶ所も何回か巡礼された隣の岩重富三郎爺さんがやって来られ、「音次郎、今日は長徳寺の南部八十八ヶ所の巡礼日で、儂(わし)しゃ貴方の病気が早よう治るようにと思つて同行二人のところを貴方に加えて同行三人の心で巡礼して札納めをして参りました。ところで各札所でお接待があり、沢山おむすびを戴いた

〔長徳寺及び長野地区の話〕

長徳寺を話題の中心にして長野地区について昔の記憶を思い出しながら話してもらおう会合を平成十五年九月十日に旧通津小学校長野分校で催した。

話は色々出たが結論的に言うくと長徳寺と杵築神社等が混ざりあった内容であり、長徳寺の項、杵築神社の項とはつきり分類出来にくいと言ふことである。

参加者…(長野)岡崎静雄、小谷益雄、崎原麻人、本田源槌、村井幸、村重圭一、森重正(関係者)村中九一、清永浩園、前野弘明、森山梭一(敬称略)

鐘楼門は現在の岩政氏の家の所にあつた。現在の森重木工所辺りを昔はカワラバと言つていたが、此の辺りまで潮が来ていた。入江であつたらしい。この時代の関所役を行つていたとのこと。(松重作植…坪根の言い伝えとか。)長野はあれから思うと地盤がだいぶ上がつてきたらしい。(注…土地が上がつたと言ふのは、吉川広家公の時干拓、開作を許可された名嶋玄的が米十石作つたという記録が有る。此の干拓などと関係が有るのではなからうか。)

天神様は村重圭一さんの山の上、峯山の裾、高堂山の上にあつた。三尺角の社であつた。(高堂は吉祥坊の上、佐伯さんの上)これは現在天神山に移転、現在(平成十五年)も天神屋敷とし

ので、大師様のお裾分けです。食べてください。」と竹の皮に包んだおむすび数箇をそこに置かれた。祖父はそれは有り難いと言ひ乍ら黒大豆入りの太いおむすび二個をペロリと平らげてしまい、私の母にお茶を所望したので母が渋茶をコップに注いで手渡したところ、祖父はそれを二口ふくんだが、そのお茶はギックギックと詰まつて嚥下できない。一部始終を見ておられた森山先生「現在の医学では全く解せませんね。」とポツリと洩らされた。それから数日後祖父はこの世を去つた。



長徳寺



本堂



仏像

て残つて重岡氏の所有地となつている。それを解体して下に降りる時大相撲の大会があつた。四国の方からも相撲取りが来たと伝えられている。当時としては大変賑やかな信仰の厚いお宮であつた。高堂にも七堂伽藍の二つがあつた。それより一寸北へ行つた所に広い所があつた。天神社に行く道が由宇の岡山から上り、崎原さんの所を通り、村中スミさんの所を通り高堂に至つた。これが高堂への幹線道路であつた。文久元年生まれの村重圭一さんの祖母は嫁入りの時この道を通つた。着物を着て歩ける道ではなかつたと話していたとか。現在は農道になつている。

杵形観音の手前小堂(広く地区を意味する名)と言ふ所(ボーイスカウトのキャンプ場の小堂のまだ曲がつて上の方。杵形観音の上、学校の左側。一本松に上がる道で昔は松が沢山有つたから分り易かつたが、今は枯れて分らなくなつた)に大番と言ふお寺があつた。かなり大きなお堂があつた。屋敷が六畝(約一八〇坪)あつた。寺屋敷と言ふだけで教覚寺かどうか分からないが、「キガキサーにあがろう」と子供の頃言つていた。松重作二さんが「このお堂の吊り井戸に金を埋めたと言ふ言い伝えがある。掘つて見たいと思つたから村重圭一さん一緒に行つてみようと言われたので村重圭一さんもバチグワを持って行った。瓦が沢山有つた。」

開ケ堂があった。昔松井さんの家があった所が開ケ堂。村重圭さんの畑も山も田も開ケ堂であった。

岡の堂は由緒ある所で、浄専寺(由宇・横町)の奥の院があった。岡の堂の所に明治時代の頃金光教もあった。現在は灘(藤生)に移っている。米中千代槌さんが開いた人であり、最後でもあった。奥さんは本呂尾の谷林家から来られた。当時から信者が多く、長野、通津、灘からのお参りがあり、特に灘の漁師宅には金光大神がほとんどの家に祭つてあったほど。この講社は通津の人が二里塚(通津南町)に連れて行き、その後灘の青木に移設、現在は福本師が継続されている。

(村重圭二氏資料)

院がつくのは沢山有る。字名じゃろう。例えば、明王院、しんこう院、じほう院、古坊院、吉祥坊院など。これらは皆寺の跡。五厘石など沢山ある。然し、跡地は水害で流れたりして良く分らない。年寄りから聞いた話によると、一七三〇年頃、一〇〇日の雨が休みなく降り続いた。下の松重延男氏の畠にくずれ落ち、現在も瓦等が沢山山のようにある。この辺りにあった青い物が皆溶けてなくなった。竹の笹の実を食べて餓えを凌いだと伝えられている。この雨で高堂も崩れ落ちた。高堂だけでなく此の辺りの山が皆崩れた。高堂の下の山を低堂と呼んでいた。話に聞くと三〇〇年から五〇〇年前頃には大雨がよく

昔、長野は十二軒しかなかった。佐伯家の由来によると九州から沢山の部下を連れて来て吉祥坊に住みついた。

(参考…記録には文禄元年(一五九二)この頃から長野の人口は分家分家して増えた。豊臣秀吉の朝鮮征伐(一五九二)に長野から三人出ている。松岡五郎大夫、坪根の松重、伊ヶ崎でこの人たちは十二軒の内の三人であろうと思われる。全員戦死した。

長野には長徳寺の七堂伽藍とは別に七堂があったと聞く。高堂、小堂、開ケ堂、岡の堂、辻堂がそれで後の二つは分からな。い。(筆者、岡の堂と辻堂はダブッている?)小堂は大判と言っているが、昔大判が沢山出たと伝えられている。

長徳寺はすばらしく、太いものであったが、教覚寺は舞々の丘の方にあった小さい寺だった。

村上建設(村上秀夫社長)の家の上の山に墓がある。この墓など村上水軍と関係があるのではないか。

〔長野分校〕は松重千代子氏宅(昔の坪根)の南側にあったが、流出のため現在地に移転した。この分校は由宇小学校の長野分教場として開設され、通津村に合併時に通津小学校長野分教場となり、岩国市合併と同時に分校と改称された。

じょう又はりょう(漢字不明)が岡の堂の屋敷にあつて、長徳寺八十八ヶ所内で大きな地藏尊があり、毎年盆明けに施

降りよつた。長野全体が岩盤が固く、その上に泥が載っているだけの状態だから、雨が降るとその泥が下に落ちる。

長野は戦前(昭和二〇年代まで)には皆屋号で呼んでいた。今の若い人はほとんど知らない。年寄りは今も使う。これは土地の名や歴史などに関係したものもあるのではなからうか。長野下は村上水軍の関係かどうか分からないが、同姓が多いので屋号などを用いた。

(参考…通津地区はその家の職業で呼んでいたものが多い。その他は土地名を名字の前に付けた。例えば新宮の〇〇宅、峠の〇〇宅)分かるだけを挙げる

氏名	屋号	発音
村中清人	中河原	ナコーラ
兼中満生	丸子	マルコ
古川ミチ	古屋敷	フルヤシキ
村重圭一	うぐめが迫	ウメガ迫
榊村庄太郎	空	ソラ
浴中松芳	浴	エキ
村中市人	上	ウエ
勝井 功	崎の河	サキノカワ
松岡 操	五郎田	ゴローダ
村重キミ子	向い	ムカイ
和木キヨ子	和木前	ワキマエ
岡 臯月	岡の堂	オカントウ
佐伯一男	吉祥坊	キチジョウボウ
河田清一	久保の河	クボノカワ
木村定澄	開ケ堂	カイガドウ
松重千代子	坪根	ツボネ

餓鬼があり、八郎小路班で寄付を集めて行つていた。長野中部落は昔から火災が続き、約百年の昔から神楽を奉納したところ火災がなくなった。今も四年に一度各戸が当屋として神楽を奉納している。

〔杵築神社について〕昔の杵築神社があった所は杵築山にあった。現在は長野中木村キミさんが持っている。木村の屋敷が有る辺り。明治の政令で不動産二〇〇〇円の財産がない神社は潰されることになった。どれも小さかったので、どれを残すか籤引きをしたら杵築になった。財産も一番多かった。全部の寺社を集めるのに良い所を求めた結果、一番眺めも良い長野中が見える中心的位置にある現在の地になった。崎原さんの山を一時天神様の財産に切り替えて杵築神社になった。崎原さんの家の上辺りにも小さい神社があったことも関連しているらしい。

〔大歳神社〕は長野に二個所有り、長野上の大歳と長野中古河平(迫中氏所有地)にあり、神社統合時に移転した。これら、天神社が昔に移転し、その後杵築神社、大歳神社が移転して、現在の杵築神社として祭られており、その鳥居は四個所あるが、これは各々の神社のものを移転したものである。天神社と一般には言っているが、杵築神社が一番大きく、この名を取つて杵築神社としたと伝えられている。

〔長野村の八幡について〕兼中さんの裏辺りに八幡のお堂が建っていた。あれが長野村の八幡様であった。堂の跡があったが、その後どうなったか分からない。あの辺りには八幡様の田もあった。八幡様は通津の八幡様に合併した。

〔専徳寺と弘中三河守隆包〕

専徳寺は寛永元年(一六二四)に開基された。開基当時は通津の背後に聳える高照寺山にあった。高照寺山には常福寺という真言宗の寺院があった。この寺は弘法大師が中国唐からの帰途、霊山を求めて、この山に二字を建立されたと言う伝説があり、かなり規模を持つ寺であったが、住持の了空(毛利家重臣六戸出身)は故あって四国の松山堀江村へ去り、無住となっていた。

吉川広家公は厳島合戦後、当時四十歳であったが、元和二年(一六二六)入道し、如兼と号し、家督を嫡男広正公に譲り、元和七年(一六二二)次男彦次郎(後政春と称し、石州吉見領主)を帯同して通津本呂尾に隠居した。(註、御隠居領四五〇〇石、寛文八年(一六六六)の古村記によれば「侍屋敷三五軒、仲間(ちゅうげん)屋敷二十八軒」)家臣多くは浄土真宗西福寺(岩国市岩国)の門徒であったが、信仰が厚く、新たに通津に浄土真宗の寺院建立を願いだした。

(註、当時の通津郷の人家数は農家二五四軒、漁師九十軒)

払い、現在地に貞享二年(一六八六)頃移転した。移転後、経蔵、本堂、庫裏、書院などを建立した。元禄十四年(一七〇二)鐘樓建立を最後に七堂伽藍の体裁を整えた。証拠の棟札は残っていない。経蔵前に立つ石灯籠には元禄十五年(一七〇二)の銘が刻まれている。

この寺地の選定について一つの伝承がある。吉川家中の土と寺関係者が適地を求めて海岸線を歩いていた時、一本の古い松があり、背は低い枝は四方に広がって誠に見応えのある松樹であった。二羽の鷹が飛んできて頂上で羽を休めた。折しも朝日が燦々と射して、鷹は金色に輝いた。『瑞兆(ずいちよう)この上なし』と衆議一決して寺地が決まったという。十一世義啓師はこの伝承を絵となし、これを下絵として石川県輪島の名匠治太郎に委嘱して、輪島塗金蒔絵の客膳二十人前を調整した。その客膳は今も大切に保存されている。

専徳寺にはこの他にも貴重な法物がいろいろとある。阿弥陀如来御本尊(立像)・享保十二年(一七二七)八月、四世賢了師代に祖山に願い出て下附。

阿弥陀如来御本尊(座像)・弘法大師が建立されたという常福寺にあった御本尊で、恐らく鎌倉時代の作ではないかといわれる。

○本堂の屋根修復 平成六年十二月竣工

広家公父子は広正公に対し、この常福寺を改宗し、改めて浄土真宗の一寺建立を願いだした。開基には高森正蓮寺開基了善師の三男善超師(一六一四〜一六六二)(弘中三河守隆包の曾孫)を迎えることになった。寛永元年(一六二四)善超師は祖山に願い出て、寺号を光照寺(のち専徳寺、四世賢了の時、正徳三年(一七二二)五月、寺号光照寺を専徳寺と改称することを免許される。)を賜った。専徳寺初代住職となる。

専徳寺古文書によれば「新たに建立の寺なれど彦次郎君より建立せしめたる賢慮を慕い、常福寺の檀家は勿論、そのほか通津、保津、青木、黒磯、六呂師等の人民我も我もと光照寺の檀家となり、たちまち数百軒を数え、後年益々繁栄に及びかけることこれ広家公御父子通津へ御引越に事おこり、殊に彦次郎君懇志の成せしむるところなり。」と。三世澄性(ちようしょう)(一六七九〜一七〇九)は「防長両州において一切経(註：釈尊一代の説法八千四百の法門を記録した経文で長短大小八千余巻、馬に積んで十六駄半といわれる膨大な数量の書物)を安置するもの之れ無く、国土安全の御祈願相成りし事なり」(「社記」元禄八年(一六九五)とある一切経蔵を貞享三年丙寅(一六八六)九月九日に建立した。このことが契機となって吉川領主広嘉(広家の孫、広正の子)は寺禄として水田三町歩、それに寺領を寄進した。ここで光照寺は高照寺の寺領を取り

○本堂の内陣修復 平成十七年十二月竣工予定

(迫中融著本に十世智才和尚についてのエピソードがある)

明治の虫送りに下本呂尾が参加しなかった。専徳寺の智才和尚により虫送りは迷信とされたため、以後通津の虫送りは中止されたという。(新町、松本秋二氏談)

郷土史辞典(昌平社)に国家神道にタテついた僧として載っている。明治十三年(一八八〇)通津の真宗僧親子が伊勢神道のお札を買う必要はないと説教して役人をあわてさせたという。若き智才和尚の話らしい。

幕末に周防から島地黙雷(智才和尚の親元、防府市明覚寺と姻戚関係)等の真宗僧が出て活躍し、また、当時の薩摩の神道と長州の真宗の対立が智才和尚の言動に影響しておらう。専徳寺の門口に黙雷手植えの松がある。(現在は枯れている。)

智才和尚の晩年は好々爺で少年に筒(たけのこ)和尚と呼ばれていた。少年少女を集めて、中国で冬に筒を食べさせた孟宗の孝行話をよくしていた。(泉迫、佐上明德氏談)

〔弘中三河守隆包〕

岩国の地には四世紀頃すでに庶民の集落があったことが推定される。六〜七世紀頃になると有力な氏族の住居が認められる。開発領主や地頭の名は明らかでない。

平安末期、当地方に岩国を称した一族が居て、平家に属して

相当の勢力を有していたらしい。源氏制覇のあと、岩国の一族は滅亡したのではないが、やがてこれに代わって岩国地方に勢力を張ったのが清繩氏、後の弘中の一族である。その先祖は清繩三郎良俊といい、源氏の家臣として義朝に属していたが、平治の乱後、岩国室木に流れ来たと伝える。

貞和三年(三三四)清繩左衛門尉良兼の孫弘中堂内兼胤が白崎山に大きな社殿を造営して、社領神宝などを寄付したと記述されている。

応仁元年(四六七)いわゆる応仁の乱が起こり、大内政弘は山名方に味方して分国の兵をあげて東上した。岩国の弘中弘信もこれに従った。弘信の弘の字は政弘あるいは教弘の二字を授けられたのであるから、この時代には大内氏直属の部将としての地位を獲得していたものと思われる。

文明十年(四七八)弘中六郎護兼に岩国本庄二十石の地(弘中三郎二郎跡を安堵(あんど)させた)と『正任記』に見える。これは庶流であろうが、こうして一族によって岩国の地が支配されていたのである。天文年間の当主弘中三河守隆兼(たかかね)隆包とも書く)はすでに大内義隆旗下の股肱(こうこう)であった。(岩国市史より)

弘中氏系譜によると初代は貞純(さだずみ)親王、五十六代清和天皇第六皇子。貞観十六年(八七四)誕生、延喜十六年

(九二六)薨死。四三歳。十五代隆兼。十四代興勝嫡男三河守と称した。

隆兼は天文十二年(五四二)大内氏が総力をあげて尼子氏を攻めた出雲遠征には大内の重臣陶隆房(後に晴賢と改名)、杉重矩、内藤興盛などとともに出征した。(註:この時元就も安芸より出征。結局この出雲遠征に大内義隆は失敗し、この遠征を遂行した隆房を大内義隆は疎んじはじめた。これが九年後の大内家滅亡の遠因になる。)

隆兼はその後も陶隆房の軍監として数々の遠征に参加するとともに、隆房と盟友関係にあった毛利元就ともしばしば接触をもっている。天文二十年(四五二)九月陶隆房は大内家の武闘派の家臣団をまとめあげ、クーデターを起こして大内義隆を大寧寺での自害に追いやるが、その年の始め義隆は陶と毛利との合力をおそれて元就に書状(二月二十七日付)を送る。その書状を両者に親しい弘中隆兼に託して吉田の郡山城に届けている。

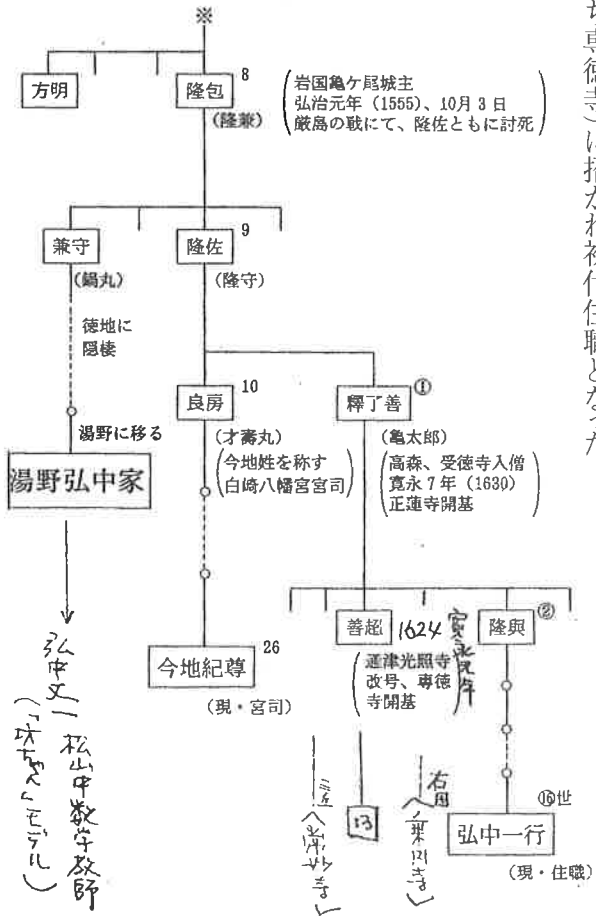
弘治元年(一五五五)大内なき後覇権をめぐって陶晴賢(はるかた)と毛利元就とは厳島で大決戦を行う。この時隆兼は「厳島に攻め入ることは毛利の謀略」と諫言(かんげん)するが、晴賢は「臆病者の迂愚(うぐう)の言」とのしる。ののしられても武士の意地で晴賢に同行し、死を覚悟で最後まで毛

利軍と戦った。隆兼・隆佐(たかすけ)隆助とも書く)父子は本陣を守り、吉川元春の軍と戦い、一時は吉川軍を追い込んだが、熊谷直らの加勢で、ついに十月三日厳島の竜ヶ原で討ち死にをする。

この隆佐には二歳になる遺児(幼名亀太郎)があり、父亡き後玖珂郡用田村で成長し、十三歳で出家し、周防高森二井寺で出家受戒し、十八歳には浄土真宗に帰依して高森受徳寺(のち受光寺)の弟子と成った。釈了善の法名を賜った。その後高森に正蓮寺(周東町)を創建した。その三男釈善超が光照寺(のち専徳寺)に招かれ初代住職となった。

資料提供
弘中英正住職

弘中隆包



本堂



経蔵



阿弥陀如来本尊座像

〔弘中聰明著「日照山専徳寺の歴史と事跡」弘中英正氏説明文

桑田忠親著「毛利元就のすべて」(がわかる本)



弘中隆包の墓



洗耳(せんじ)手水鉢



松と旭日に鷹の盆

隆包哀歌

(弘中隆包親子を悼む)

作詞 森山峻一
作曲 藤本秀規

一 軍勢二万 陶晴賢は
敵島合戦 意気燃ゆる
岩国領主 弘中隆包は
島内決戦 不利と推し
桜尾城攻めを 諫言す

二 波濤逆巻く 暴風夜
「勝つ」を合い語の 毛利元就に
臆病迂愚の 隆包と
晴賢罵声に 弘中隆助も
武士の名折れと 決死の剣

三 屍をさらす つわものの
無常の戦場 塔ノ岡
恨みの心 鎮めるは
浄土の道と 釈了善
南無阿弥陀仏 祖父よ父

〔天理教通津分教会〕

明治三十三年(一九〇〇)頃、善本宇氏(後の周東大教会理事)と三上傳之助氏(後の吉松宣教所初代所長)の二氏が善本氏の遠縁にあたる通津村郷乗越、松村六兵衛氏(松村勇元岩国市会議員の祖父)の宅に立ち寄り、天理教の教えを話した。この時一緒に話を聞いた人の内、松村六兵衛、妻チカ、市木文之助、市木カ子(かね)、米中静太郎、迫中嘉助、広中フサ(敬称略)らは深く感銘し、早速信徒講社に加入(入信、信者)し、布教を開始した。中でも生まれて間もない長男市木諫(いさむ)氏が眼病(青そこひ)であることが解かり、この病気を助けて頂くため市木カ子氏は布教に出ることに心を定め、子供の目には御神水を与え、半年位でお助けをいただいた。病気が回復したことに感謝した市木文之助、カ子夫妻は自宅の土地や建物を宣教所にあて布教に勤めた。

信徒も一〇〇戸以上にふくらんだ。しかし、市木氏には担任教師の資格がないため上級承事役員山近元治郎氏に所長を依頼し、大正十四年(一九二五)四月十八日山口県玖珂郡通津村字通津一四四六番地に通津宣教所の名称の許しを頂き、山近元治郎氏(松村六兵衛氏の子、松村勇氏の叔父)が初代所長になった。

山近氏は籍が玖珂郡祖生村にあったため、祭典前日に宣教

所へ来て祭典を勤め、翌日実家に帰るといふ状態であったため、『においがけ』(二軒二軒布教して歩くこと)や信者の丹精は主に市木カ子・諫親子によつてなされた。

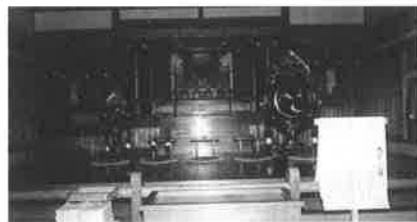
昭和十六年(一九四二)十月二十八日初代山近元治郎氏の辞任により市木諫氏(明治三十四年一月二十日、昭和四十二年六月二日)が二代目会長の任命の許しをいただいた。

現在は市木諫氏の長男幸雄(昭和十八年九月三十日生)氏が三代目会長を勤めている。昭和五十八年五月二日に通津二八九五―に移転、奉告祭を執行し現在に至っている。

(市木幸雄氏の説明及び記録による)



新しい天理教教会



本堂



旧教会建物

〔光専寺(順正寺)〕

光専寺の開基、中村壱岐守は代々大内家人であったが、大内義長が自殺したので周防国通津に蟄居した。

通津の仏教会も大内から毛利になって大きく変動し、浄土真宗に改宗(専徳寺、教覚寺)し、新たに光専寺が出来ている。

寺の記録によると、中村壱岐守実之という者は代々大内氏の家人であつて、幾多の戦に軍功を奏したと伝える。而して、主君大内義長が弘治二年(一五五〇)四月、長門国長福寺に於いて誅せられたため、乱をさけて、この通津に隠居したとある。

さて、当寺の開基を了言という。中村彦六は天正元年(一五七三)四月五日剃髪、それまで浦年寄の役を勤めて居られたが、天正元年顕如上人御裏書之弥陀の尊彰を申受けてより仏縁を喜び、年寄役は嫡子與左衛門という者に譲り、自分は境善教寺で法牀して了言と称し当寺の開基(天正元年十月五日創建)となる。

二世浄甫は寛永十年(一六三三)十二年説も有る。「母校の歩み」通津小・中共著)十一月十九日日本願寺に寺号を申請し、これより順正寺という。三世周尊の時慶安三年(一六五〇)八月十五日に本堂を建立。五間半四面であつたという。元禄二年(一六八九)釈迦堂建立。四世周岸、五世全波、六世教心、七世達空と続き、教心再任職となり八世となる。九世達道の時、

うな墓を安永四年(一七七五)十二月に作り、その菩提を弔つたといふことである。

(松村勇氏「通津あれこれ」より)

光専寺では親鸞聖人降誕会の行事として毎年五月二十日夜十九時三十分頃より提灯行列を行っている。憲昭和尚の時、大正十三年頃?始まった。当初は門徒衆が二つ提灯を買い、名前を書いたものを寺境内に飾り、また、手に持ち、街を歩いた。現在は寺が全て用意し、太鼓を乗せた車に飾り、子供たちも手に持ち、「祝え、祝え」と歌いながら、光専寺を出発し、乗越橋、桜井戸のある周東二五号線を下り鉾八幡様の前、通津駅、通津の街中を通つて光専寺に帰る。

平成九年(一九九七)八月、本堂を改築。

現任職は平成五年(一九九三)十二月、第十七世中村光則氏に。継承法要は平成十年五月三日に行われた。



爛徳利型の墓石



「正」の字の瓦

明和九年(一七七二)二月二十一日本堂再建。六間半四面。天明七年(一七八七)十二月二十四日、当寺の末庵畑釈迦堂壱ヶ所をつくる。文化八年(一八二二)庫裏再建す。

十世大安、天保六年(一八三五)客殿建立す。十一世西順の時、嘉永三年(一八五〇)山門建立する。この山門は地方稀に見るもので、岩国の甚五郎といわれた福田武兵衛の作であるが、この人は中町福田氏の先祖なりといわれる。

十二世周応の時、慶応三年(一八六七)四月六日、吉川家故障のため寺号を光専寺と改める。(明治二年四月十六日と書いた本も有る。)十三世を円浄といい、十四世映看の時明治三十五年(一九〇二)庫裏の増築修繕。十五世憲昭の時、昭和九年(一九三四)十月本堂葺替。昭和十二年(一九三七)庫裏一部新築。十六世映昭の時、昭和二十三年(一九四八)山門の葺替を終える。

玖珂郡志に順正寺とあり、受徳寺末、開基中村壱岐守、寛永十一年(一六三四)寺号判物ありとある。

ところで、この寺の鐘つき堂の側に形の珍しい墓が一基ある。台座の上に爛徳利型の墓石が建てられ、その上に大盃を模した大石が伏せてあるのを見る。これは釈道円信士の墓で、俗名満田屋金重郎という信徒が寄金して鐘つき堂をつくつたが、この人の功績をしのため生前好物であつた酒にちなみ、このよ



光専寺山門

〔教覚寺〕

教覚寺は長野大歳にある。真宗西本願寺派。山号を紫雲山という。高森受光寺末寺。明応四年(一四九五)創建開基。茲覚。教覚寺は本堂は岩国市に有り、庫裏は由宇町に有る。

村重圭三氏談「小さなお寺で僧兵が支配している時代峯称山、舞々、現在の大歳と焼き討ち等を逃れるため各所を転々と移転したと言われる。」

当時に存する旧記を中心にこの寺の歴史を述べる。

旧長野村に宗廟八幡宮があつた。現在は鉾八幡宮に合祀されているが、この八幡宮に宮僧がいて、永年に亘り大伽藍を持っていた。この頃は源平時代であつた。弁慶の家来に正慶という

剛勇の者があり、仏道の修業をしていた。この武士も源平合戦に加わり、平家遍く滅び、天下は源氏のものとなるにおよび、つくづく世のはかなさを感じ、菩提の道を求めるため赤間ヶ関から源氏の陣中を独り出奔して上り、当村に至った。しばらく当村に足をとどめていたところ、富楼那院の法師が大徳の聞こえが高いのを聞き、この方に知識を頼もうと院に立ち寄り、身の終始を語った。法師はこのことを聞き、寺院に抱えこんだ武士の主将を求めていたところなので、とても喜ばれ早速寺に住居させることにした。こうして菩提の道を求めたが、遂に家老と成り山田惣左衛門宗貫得定居士と称し、日夜修業怠ることがなかった。

こうして代々山田惣左衛門を名とし、世を経て八代の血孫山田惣左衛門宗清は昔の宗貫に劣らぬ英傑であった。

時に明応の頃(四九二―五〇〇)海賊の群れが富楼那院に踊り込み、寺僧をはじめ、出入りの侍数十人を悉く切り伏せた。夜も深更におよんだので、境外の諸侍の家はこの事件を全く誰も知らなかった。また惣左衛門宅はるか遠く、たまたま惣左衛門は所用があつて他出し、主従両三人夜更けて長野尻の道から帰ってみると、本院の物音が心配なので踏み込んでみると、余りのことに驚き、直ちに盗賊二十人を切り伏せ、寺僧などの死体を改めるに、法師をはじめ皆深手を負い、もはや

しかし、この地も余りに高く海上より聳え一目に見えるゆえ、鳴谷と申す当時奥の谷底に引き移った。ところが、鳴谷の草庵は弘治二年(一五五六)に大洪水にあい、殿堂悉く流失し、財宝等残りなくなり、その後困窮がひきつづいた所々に草庵を結んだようである。

(松村勇氏 「通津あれこれ」より)

明治三十五年(一九〇三)現在の地に寺地を開き、由宇町の重岡氏の発起で明治三十六年(一九〇四)十二月日本堂を建立し、今日に及んでいる。鐘つき堂は昭和三十一年九月三十日に建てられたが、最初の梵鐘は戦争中に供出し、戦後作つた梵鐘は材質が悪くひびが入つたため鐘つき堂及び梵鐘すべてを平成九年十二月再建した。



「知足寺跡」の石仏



教覚寺旧鐘堂

事切れているようすであつた。ただ下人一人息のあるのに気付き、事の由を尋ねるに、夜盗乱入の始めより相語り、何分覚悟なきところに自刃で切り込まれたことを語り終えて空しくなつた。惣左衛門は急ぎ死体を葬むり法師などを厚く葬つたことはいふまでもない。

惣左衛門は世の無常をいやというほど感じ、いよいよ菩提心をおこした。そこで、諸方の知識を尋ね聞き、達如上人が教導最中だったので、富楼那院をしばらく家来の者に頼みおき、直ぐに上京し石山の本願寺にお訪ねし、身の終始を語り、御教化を被り、浄土門に入られ、法名を立音といい、尊像を申し受け、帰国し、富楼那院の古跡に寺を建立した。寺号の教覚寺も同時に賜つたという。

富楼那院の地に草創し、御絵像を本尊に安置し、日夜教導怠りなく真宗として辺地に開かれ始めたといわれる山田鎮座の八幡社は陶尾張守が乱の災いに罹り、遂に破滅したようである。

立音は教覚寺の住持として仕事をしたが、所詮乱世のため、海賊や山盗の者が余りに多いので、その難を避けるため寺地を磨石川という山中に移した。今もその旧地がはっきりしており、地の中央に平らな盤石がある。世人はその下に鐘または美筆を埋め終えたといひ伝えている。



本堂

教覚寺の歌

- 一、紫雲の山に六字の御名
明けよ目覚めよわが心
法の高嶺による友は
清きまどいぞ教覚寺
- 二、紫雲の山に慈悲の御名
浮世は夢ぞあわき世と
法の高嶺による友は
光にみつる教覚寺
- 三、紫雲の山に永久の御名
真の教かしくみて
法の高嶺による友は
敬慕にたごむ教覚寺

(作詞 山田隆徳)

〔知足寺と大愚禅師〕

知足寺(ちそくじ)は明和四年(一七六七)頃、(註・安永八年(一七七九)の説も)現在の長野中に大愚禅師(だいくうぜんし)によって建立された。知足寺とは(吾唯足を知る)の意からとられているらしい。知足寺には檀家がなかつたため廢寺となり、後景福寺と合併した。

大愚禅師は岩国で修業後、長野に托鉢に来て柿の木の上で座禅し、長野川で大根の葉を拾って食べていた。長野の資産家

だった貞田氏がこの和尚の行動に感心して知足寺を建てた。知足寺の歴代の墓の並びに貞田家の墓がある。

(参考・貞田直輔氏が最近まで守をした。氏は久賀女学校校長をしていた。末娘は墓のすぐ近くの大柳の家で亡くなった。)

東沢瀉先生も和尚に心酔されたらしく、大愚和尚を読んだ詩が残っている。

遊景福寺大愚師開基也句中及之

高僧志留偈 自覺不尋常

靈境真堪慕 塵機都可忘

(立派な僧がここに経文を残し、その悟りは深い。)

(この靈境は人に慕われ、俗事を忘れることができる。)

(村中啓二著「大愚和尚伝」)

大愚禪師(大愚衍操(えんそう)禪師)は防州日積中山邑(現柳井市日積中山)堺原の大段(おおだん)屋敷に鶴田家二男として元文三年(七三三)に生まれた。

享保二年(七二七)十二月五日、干害、虫害による凶作が続き、ついに日積村の百姓が岩国藩に訴訟し、他地区も加わったが、萩役人などとのトラブルがあった。このような社会情勢を見て育った大愚禪師はこの社会を救うのは僧の道以外にないと出家したと伝えられる。そして岩国錦見大円寺で修業し得

度。均溪という。明和六年(七六九)(東光寺展自賛には安永

八年(七七九)とある)通津長野に知足寺を開山。また、通津

泉迫の景福寺を改宗。徳山権現町自得寺を開山した。寛政

元年(七八九)岩国大円寺第七代住職となり八年間在職し

た。六十二歳の時寛政十年(七九八)大阪南河内今井法雲寺

第三十五代住職をし、毛利七代藩主重就の信頼厚く、寛政十

三年(八〇二)から十六年間萩東光寺十五代住職を務めた。こ

の時文化九年(八二二)山門の竣工を行った。八十歳であった。

(参考・山門または三門と言う。三門とは本来、空・無相・

無作という涅槃に至る三つの門(三解脱門)をいう。その三つの

入り口になぞらえて三門という)文化十四年(八二七、年表は

八一八)江戸上野に安福寺を開山したが、病を得て、萩中津江

に帰り養生したが、文政七年(八一四)九月十八日往生を遂

げた。八十七歳であった。

(村中啓二氏の話と東光寺展自賛とを元に)

〔蓮照(昌)院(舞々)〕

玖珂郡志「金石山蓮乘院観音」

この観音堂をめぐって明治に舞々部落が割れて裁判までやった記録がある。原因は吉川広家が由宇在住当時(慶長五(一六〇〇)年頃)、岩国城の御普請用木にこの蓮照院が長徳寺とともにとられ、その後地元負担で再建された。再建寺の負担の

事情で寺の管理の意見が割れたため。吉川氏打ち入りまではこの観音堂は近くの長徳寺(禪宗、永興寺末)の末庵であった。

舞々の蓮照院は御打ち入りの時毀されたが、元禄に浄恵寺弟子恵性が再建した。(由宇浄恵寺の末派院庵録) (迫中融氏著本)

蓮照院は舞々橋を渡り、舞々薬師様を過ぎ少し進む。村岡覚氏の上、右の丘に建物が見える。今も盆などに浄恵寺からお勤めにこられるが、今の住職はこの院の謂れは知らないそうだ。



蓮照院



蓮照院前庭